

特248
724

南齊書

三好達治



始

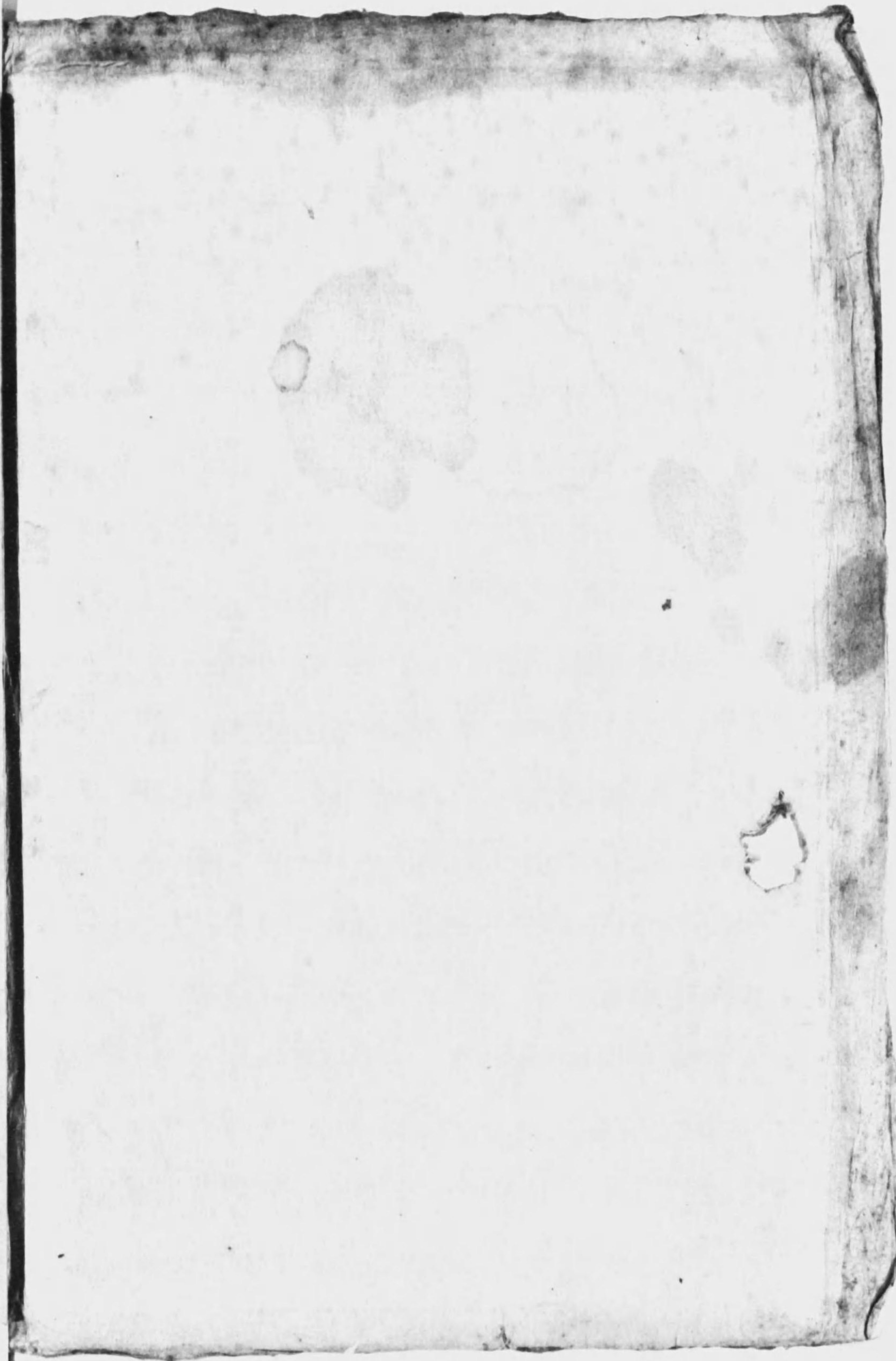


特219

724

南窗集

三好達治



市井發賣本壹百部の内

特248
724



社木の椎



鴉

静かな村の街道を 笈が横に越えてゐる
それに一羽の鴉がとまつて 木洩れ陽の中に
空を仰ぎ 地を眺め 私がその下を通るとき
ある微妙な均衡の上に 翼を蹴めて 秤のやうに揺れてゐた

+

湯沸し

たぎり初めた湯沸し…… それはお晝休みの 小學校の校庭だ
藤棚がある 池がある 僕らはそこでじゃんけんする
僕は走る 僕は走る…… かうして脛をついたまま
夜の中に たぎり初めた湯沸し……

+-

静夜

柱時計のチタタク ああ時間の燕らが
山を越える 海を越える 何といふ静けさだらう
森の中で 鳥が鼓をうつ やつとこの日頃
私は夜に對し得た 壁を眺め 手を眺め

蟋蟀

新聞紙に音をたてて 葡萄のやうな腹の 蟋蟀が一匹とびだした
明日はクリスマス この獨りの夜を 「愕かすぢやないか
魔法使ひぢやあるまいね そんなに向う見ずに 私の膝にとび乗つて」
「ごめんなさい 何しろ寒くつて……」

信 號

小舎の水車 藪かげに一株の椿

新らしい轍に蝶が下りる それは向きをかへながら

静かな翼の抑揚に 私の歩みを押しとどめる

「踏切りよ ここは……」 私は立ちどまる

椿 花

これはいづこの國 いづれの世の建築だらう 私の夢なら

こんな建ものの中に住みたい 今朝の雨に濡れて

掌上に ややに重い一輪の紅椿 その壁に凭れて

私は樂器を奏でる この騎士の唇を 花粉が染める

ブブル

ブブル お前は愚かな犬 尻尾をよごして
ブブル けれどもお前の眼
それは二つの湖水のやうだ 私の膝に顔を置いて
ブブル お前と私と 風を聴く

遅刻

やれやれ汽船は出てしまつた
森々たる春 霞の奥の遠い島
島の火山 私を見る電柱に
風に吹かれる蟲の觸覺

節物 四

家鴨

にび色の空のもと ほど近い海の匂ひ
汪洋とした川口の 引き潮どきを
家鴨が一羽流れてゆく
右を眺め 左を眺め

蟹

村長さんの屋敷の裏 小川の樋に
泥まみれの蟹がのぼつて
ひとりで何か呟いてゐる
新らしい入道雲が 土手の向うにのび上る

鶴鴿

黄葉わみぎして 日に日に山が明るくなる

谿川は それだけ緑りを押し流す

白いひと組 黄色いひと組 鶴鴿せうがいが私に告げる

「この川の石がみんなまるいのは 私の尻尾で敲たたいたからよ」

馬

茶の丘や

桔槔はねつらぐ

馬

梅の花

友を喪ふ 四

二十二

首途

真夜中に 格納庫を出た飛行船は
ひとしきり咳をして 薔薇の花ほど血を吐いて

梶井君 君はそのまま昇天した

友よ ああ暫らくのお別れだ…… おつつけ僕から訪ねよう！

展墓

梶井君 今僕のかうして窓から眺めてゐる 病院の庭に

山羊の親仔が鳴いてゐる 新緑の梢を雲が飛びすぎる

その樹立の向ふに 籠の雲雀が歌つてゐる

僕は考へる ここを退院したなら 君のお墓に詣らうと

二十三

路上

卷いた楽譜を手にもつて 君は丘から降りてきた 歌ひながら
村から僕は歸つてきた 洋杖を振りながら
……ある雲は夕焼のして春の鳥
それはそのまま 思ひ出のやうなひと時を 遠くに富士が見えてゐた

服喪

啼きながら鴉がすぎる いま春の日の眞晝どき
僕の心は喪服を着て 窓に凭れる 友よ
友よ 空に消えた鴉の聲 木の間を歩む少女らの
日向に光る黒髪の 悲しや 美しや あはれ命あるこのひと時を 僕は見る

牝雞

この庭の叔母さんたち 牝雞の艦隊は樹の間を来て
私の窓の下で 彼女らは砂を浴びる
やがてその黄塵が 私の額に流れてくる なるほど……と私はうなづく
ははあん 今年の春は この邊から始まるな

牛

つんと澄して 新緑の樹立の向うを 電車が行く
猪牛が土手に立つて それを呼びとめる 「ああ…… ああ……
俺はひとり…… 日が暮れるよう……」 だがまだ三時
曳船が上ってくる あげ潮にのつて 綿を積んだ荷船が三艘五艘

旅人

ひとたび経て 再びは来ない野中の道
踏切り越えて 菜の畑 麥の畑
丘の上の小學校で 鐘が鳴る
鳩が飛びたつ

鹿

午前の森に 鹿が坐つてゐる
その背中に その角の影
弾道を描いて 蛇が一匹飛んでくる
遙かな谿川を聴いてゐる その耳もとに

土

蟻が

蝶の羽をひいて行く

ああ

ヨットのやうだ

路傍

路にそへる

小窓の中の かはたれに

けふも動ける

馬の腎見ゆ

霽れ

土蔵の屋根に 鯉幟の尾が垂れてゐる
赤煉瓦の工場の裏に 水禽が二羽まひ下りる
運河の水門は閉まつたまま 海は泥を嘔んでゐる
——みな 意味あるさまに

旅舎

荷馬車の宿で 馬が鼻を鳴らしてゐる
憂々と 前脚で床を掻く馬よ その音はやみ その音はまた始まる
夜の悩み 夜の莊嚴
私の眠りもまた成りがたい 天井に睡る蠅を見ながら

閒庭 二

黒蟻

疾風が砂を動かす

行路難行路難 蟻は立ちどまり

蟻は草の根にしがみつくと 疾風が蟻をころがす

轉がりながら 走りながら 蟻よ 君らが鐵亞鈴に見えてくる

夕焼

風のふくあたりに忘れられた 草の葉と砂を盛つた小さな食器 ああ

この庭の ここに坐つて

家庭の遊戯をして遊んだ それらの手 ちりぢりに歸つてしまつた手を思へば
それらの髪 それらの着物の匂ひもきこえるやう

病床

灰白い雲の壁に 小鳥の群れが沈んでゆく ああ遠い
新緑の梢が揺れ 私の窓のカーテンが揺れる
所在ないひと時 紙芝居の太鼓も聞える
電球に私の病床が映つてゐる

本

蝶よ 白い本
蝶よ 軽い本
水平線を縫ひながら
砂丘の上を舞ひのぼる

蠶

「あんなに青かったのが
こんなに黒くなったでせう
そうれ
ごらん」

三十八

街道

鐘が鳴る 小學校が静かになる
竹藪に吹入る風 竹藪から揚羽の蝶が飛んでくる
旅人が蕎麥屋に入る
郵便局の前に バスが止る

三十九

裾野

その生涯をもて 小鳥らは
一つの歌をうたひ暮す 單調に 美しく
疑ふ勿れ 黙す勿れ
ひと日として 與へられたこの命を――

限定簿の本 二百五十部
著者寄贈本 五十部
市井購買本 百部 (定價八拾錢)
昭和七年七月二十五日印刷
昭和七年八月一日發行
著者 三好達治
刊行者 百田宗治
印刷者 為谷源次郎
刊行 東京府下中野区三九 権の木社

終

